

第145回 東邦医学会例会

平成27年2月18日(水) 午後5時～7時40分

平成27年2月19日(木) 午後5時～7時27分

平成27年2月20日(金) 午後5時～7時56分

東邦大学医学部大森臨床講堂 (5号館 B1)

2月18日(水)

I. 平成25年度プロジェクト研究報告 1

1. 臨床分離肺炎球菌のキノロン感受性と莢膜型・遺伝的系統の変化に関する研究

嵯峨知生, 柏谷 淳 (微生物・感染症学)

大森病院で2012年に臨床分離された肺炎球菌は, レボフロキサシン (levofloxacin : LVFX) 低感受性株 [(minimum inhibitory concentration : MIC) が $2 \mu\text{g/ml}$] が 38.6% と増加し “耐性” 予備軍と危惧される. 今回, 25 菌株を選択しキノロン標的酵素 *parC/E*, *gyrA/B* の quinolone resistance determining region (QRDR) の変異および multilocus sequence typing (MLST) の遺伝子型を調査した.

QRDR 変異を有しない菌株 16 菌株の LVFX の MIC 中央値は $2 \mu\text{g/ml}$ で, 変異 9 菌株 ($1 \mu\text{g/ml}$) よりも高かった. LVFX の MIC が $2 \mu\text{g/ml}$ で QRDR に変異を認めない菌株で世界流行株の Taiwan^{19F}14, Netherlands³31 関連菌株が優勢で, QRDR 変異以外によるキノロン低感受性化への世界流行株の関与が示唆された.

Keywords : *Streptococcus pneumoniae*, quinolone resistance, multilocus sequence typing (MLST)

2. 消化器上皮細胞における STARD10 の免疫組織化学的検討

関 由成, 鈴木郁子 (統合生理学)

ヒトにおいて大腸癌では steroid acute regulatory protein-related lipid transfer domain containing 10 (STARD10)

の過剰な発現が報告されている. また高脂肪食が大腸癌の増加と関係しているという報告がある. そこで, 高脂肪食負荷による大腸の炎症惹起および STARD10 の大腸の炎症に対する修飾作用を明らかにすることを目的として以下の研究を行った.

野生型 (wild type : WT) マウスと STARD10 ノックアウト (knock out : KO) マウスを用い, 普通食 (normal diet : ND) または高脂肪食 (high fat diet : HF) を 50 週間負荷した. その後大腸を摘出し CD68, F4/80, CD3 の免疫組織化学的検討を行った. また quantitative reverse transcription-polymerase chain reaction (qRT-PCR) による tumor necrosis factor-alpha (TNF- α) と interleukin-6 (IL-6) の定量も行った. その結果, 高脂肪食負荷による大腸組織における炎症の亢進はみられなかった. 一方, KO マウスでは WT マウスに比較して炎症が弱い傾向が観察された.

以上より高脂肪食負荷単独ではマウスの大腸で炎症は誘引されない可能性が示された. また STARD10 は炎症に促進的に関与していると考えられる.

Keyword : colon inflammation STARD10

3. 脂質転移タンパク質 STARD10 の抗炎症効果についての検討

伊藤雅方 (統合生理学)

小田哲子 (微細形態学)

われわれは steroid acute regulatory protein-related lipid transfer domain containing 10 (STARD10) が肝臓で高発現し, peroxisome proliferator activated receptor alpha (PPAR α) 標的遺伝子の発現を正に調節していることを明らかにしてきた. Nuclear factor-kappa B (NF κ B) 経路が

活性化すると肝臓の炎症が進行するが PPAR α は NF κ B を抑制する。そこで、STARD10 の炎症への関与について検討した。高脂肪食負荷時の野生型および *Stard10*^{-/-} マウスの肝臓の遺伝子発現を解析したところ、*Stard10*^{-/-} の interleukin-1 beta (IL-1 β) の発現が野生型と比較して有意に上昇していた。また、非アルコール性脂肪性肝炎 (non-alcoholic steatohepatitis : NASH) を誘導するコリン欠乏食負荷を行い、同様に遺伝子発現を解析したところ、高脂肪食負荷時とは反対に、野生型に比較し *Stard10*^{-/-} において IL-1 β の発現が有意に低かった。コリン欠乏食による肝臓の肥大の程度は野生型と比べて *Stard10*^{-/-} において小さかった。よって、STARD10 は PPAR α を介した経路の他に、肝臓の脂肪蓄積を促進する作用があり、そのことで炎症に関与することが示された。

Keywords : inflammation, liver, steroidogenic acute regulatory protein (StAR)-related lipid transfer (START) domain containing 10 (STARD10)

4. 生と死の臨界で働く概日時計シグナル

田丸輝也 (細胞生理学)
吉住あゆみ (微生物・感染症学)

概日 (時計) システムは、環境にリセット応答し、さまざまな生理機能を制御する適応系であり、その機能不全はさまざまな病態の増悪を招くが、その要因としてストレス抵抗性の低下も考えられる。概日システムがいかんして、活性酸素のような細胞傷害ストレスに応答し、防御機能を担っているかを解明すれば、新たな医療に繋がることを期待できる。われわれは、細胞の生死の臨界点となるような臨界酸化ストレス (critical oxidative stress : cOS) が、時計リセット、細胞生存をもたらす防御系を賦活することを発見した。さらに、① cOS への応答は、概日システムと熱ショック応答 (heat shock response : HSR) の制御転写因子である brain and muscle aryl hydrocarbon receptor nuclear translocator (Arnt)-like protein-1 (BMAL1) と heat shock factor 1 (HSF1), casein kinase 2 (CK2) のリン酸化による BMAL1/HSF1 の機能・複合体形成制御によって調節される。② cOS 応答性トランスクリプトームの中核は、CK2 が指揮するさまざまなストレス応答系 (概日システム, HSR, 抗アポトーシス, 抗酸化等) のネットワークによって構成されることを解明した。

Keywords : circadian, stress, transcriptome

2月19日 (木)

II. 一般演題 1

1. Team-based learning で能動的学習が促されたかの検討

藤代健太郎, 佐藤二美, 岸 太一
(教育開発室)
赤羽悟美 (総合生理学)
池田隆徳 (大森循環器内科)
酒井 謙 (大森腎臓学)
周郷延雄 (大森脳神経外科)
内野 泰 (大森糖尿病・代謝・内分泌)
蓮沼智子 (大森膠原病)

チーム基板型学習 (team-based learning : TBL) を3年生テュートリアル (TBL) の循環器、腎・電解質、脳神経、糖尿病・内分泌、膠原病の2週目に行った。TBL の効果を検証するために、個人準備確認テスト (individual readiness assurance test : IRAT) とグループ準備確認テスト (group readiness assurance test : GRAT) の成績を検討した。対象は111名。事前学習資料としてテュートリアルの第1週目の内容で重要な項目を TBL の前日に提示した。IRAT は1問1点で5問用意し、GRAT も同じ設問を使用した。IRAT と GRAT の5回の合計点数は、最高45点、最低22点、平均 33.4 ± 4.0 点でほぼ正規分布を示した。IRAT で前3回の成績下位群は、後2回でほぼ成績上位群に近い成績を示した。テュートリアルの最終回に行ったアンケートでは74%の学生が事前学習を行うようになったと返答した。3年生において、TBL で期待される能動的学習が促されたと考えられた。

Keywords : team-based learning (TBL), individual readiness assurance test (IRAT), group readiness assurance test (GRAT)

2. 大森病院周術期センターにおける口腔トリアージオーラルマネジメント (OM) 方式の検討 (第1報)

福井暁子, 高橋謙一郎, 藤本慶子
小山修示, 曾布川貴弘, 堀越皓太
関谷秀樹 (口腔外科)

近年、周術期口腔機能管理の重要性が広く認知され、多くの医療機関で歯科の介入が行われているが、医科からの依頼に基づく受動的な介入にとどまることが多い。当科では歯科衛生士が周術期センターに出向、口腔トリアージオーラルマネジメント (oral management : OM) 方式を

取り入れることで直接介入，口腔ケアの必要性を判断している．今回，平成26年1～4月に周術期センターを受診し口腔診査を受けた患者1413名のうち，トリアージされ口腔外科受診となった患者289名の口腔診査結果，術前術後の口腔ケア回数に関し，4名の歯科衛生士間の差異について比較検討した．

口腔外科受診率に検者間の差は認めず，歯肉・歯垢・歯石の診査結果では1名の検者が突出して検出率が高かった．動揺歯・舌の状態・開口量・口腔乾燥・口臭の5項目に関しては診査時に確認しやすく，嚥下に関しては視認に加えて患者の主観によるところが大きいため，検者間の差が生じなかったものと思われた．今後，トリアージ技術の均てん化，判定基準の標準化が必要と思われた．

Keywords : oral management (OM), center for perioperative medicine, triage of oral condition

3. 東邦大学医療センター大森病院に勤務する医師における介護ニーズ調査

片桐由起子 (大森産科婦人科)
小林未果 (男女共同参画推進センター)
広田幸子 (教育・研究支援センター)

本学では，男女共同参画推進センターが中心となり，妊娠・出産・育児に対する支援性の拡充を図ってきたが，現在就労しながら介護にあたっている教職員にも支援を拡大している．今後の支援活動の在り方を検討するためにアンケート調査を実施し，本発表では大森病院に勤務する医師から得られた結果について報告する．調査協力した1523名のうち，有効回答数は1390名(91.3%)であった．そのうち医師は328名で，うち女性医師は92名(28.0%)，実際に介護中であると回答したものは11名(3.4%)であった．介護をすることになった際の働き方について，年代や配偶者の有無による回答差はなかったが，女性医師の方が「短時間勤務などの支援制度を利用しつつ仕事を両立する」という回答が多く，男性医師の方が「仕事の仕方を特に変えない」と回答した人が多くみられた．将来直面するであろう介護に対して85%以上が不安を感じていることも明らかとなり，大森病院の医師の現状，介護に関する意識，働き方の選択，必要とする支援策などの傾向を理解することができた．

Keywords : physician, caring, promotion of gender equality

III. 平成25年度プロジェクト研究報告2

4. EGFR遺伝子変異陽性肺癌における血液検体を用いたBIM遺伝子多型検索の有用性の検討

磯部和順，一色琢磨 (大森呼吸器内科)
石渡誉郎 (大森病院病理学)

Epidermal growth factor receptor (EGFR) 遺伝子変異陽性肺癌における血液検体における *BCL2-like11 (BIM)* 遺伝子欠損多型の検索の有用性を明らかにすることを目的とした．

2008年1月～2013年1月まで当科でEGFR-tyrosine kinase inhibitor (EGFR-TKI) にて加療を行ったEGFR遺伝子変異陽性非小細胞肺癌患者74例を対象としretrospectiveに検討した．その結果，BIM遺伝子多型は14/60例(18.9%)に認められた．BIM遺伝子多型陽性例は陰性例に比べEGFR-TKIのprogression-free survival (PFS) が有意に短い傾向があった (median : 290日 vs. 430日, $p < 0.001$)．Cox比例ハザードモデルを用いた多変量解析におけるPFSの予後不良因子としてBIM遺伝子多型 (HR 2.49, $p = 0.022$, 95%CI 1.138-5.449) が検出された．

BIM遺伝子多型は血液検体から polymerase chain reaction (PCR) 法を用いて，簡便かつ低侵襲で検索可能であった．

Keywords : BCL2-like11 (BIM), non-small-cell lung cancer, epidermal growth factor receptor tyrosine kinase inhibitor (EGFR-TKI)

5. 関節リウマチにおけるアディポネクチンの炎症誘導作用機序

北原加奈子，進藤恵実子 (大森膠原病)

われわれは過去に，アディポネクチンが関節リウマチ (rheumatoid arthritis : RA) 滑膜細胞からの interleukin 8 (IL-8) 産生を誘導することを示した．本研究では過去の研究をさらに発展させ，アディポネクチンの炎症誘導機序を明らかにすることを目的とした．培養滑膜細胞をアディポネクチンで一定時間刺激後，上清中の各種サイトカイン濃度を enzyme-linked immuno-sorbent assay (ELISA) 法にて測定した．アディポネクチン球状ドメイン刺激滑膜細胞において，通常の full length 型アディポネクチン刺激滑膜細胞と同程度の IL-8 産生誘導が認められた．またその他のサイトカインについては，osteoprotegerin 産生誘導が認められたが IL-1 receptor antagonist 産生には変化が認められなかった．以上より，アディポネクチンの RA 滑膜細胞からの IL-8 産生誘導には球状ドメインの関与があることが示唆された．その他のサイトカインについては今後のさ

らなる検討を必要とする。

Keywords : rheumatoid arthritis (RA), synoviocyte, adiponectin

6. 小児期の末梢血好中球 TLR2 および TLR4 を指標とした川崎病の原因解析

遊佐貴司 (感染免疫)
松岡正樹 (大森小児科)

川崎病は乳幼児期に頻発する原因不明の急性発熱性疾患である。感染症の関与が考えられているが、原因微生物は特定されていない。本研究では非感染症、感染症、川崎病患者の好中球機能を指標として Toll-like receptors (TLRs) を評価し、川崎病と感染症の関係を検討した。患者末梢血から好中球を分離し、TLR2, 4 の標識抗体を用いて細胞膜抗原を fluorescence activated cell sorter (FACS) 解析した。Mean fluorescent intensity (MFI) を膜発現量として評価し、比較検討した。その結果、感染症群と川崎病群の TLR2, 4 発現量は非感染症群よりも有意に高い値であった。川崎病群の発現量は感染症群よりも有意に高い値であった。川崎病群では治療による症状の改善に伴い TLR2, 4 発現量および C-reactive protein (CRP) 値が低下した。以上のことから、感染症群由来好中球の TLR2, 4 発現量の増加は病原体に対する反応であると考えられる。川崎病群では好中球が高い活性化状態にあったが、intravenous immunoglobulin (IVIG) 療法によりその活性が抑制され、かつ CRP 値が低下した。この成績は、川崎病に感染症の関与が示唆される。

Keywords : Toll-like receptors, neutrophils, Kawasaki disease

IV. 大学院学生研究発表

7. 腰椎椎間板ヘルニアに対する microendoscopic discectomy の手術侵襲の検証

高松 諒 (高次機能制御系)
指導：高橋 寛教授 (大森整形外科)

腰椎椎間板ヘルニア (lumbar disc herniation : LDH) に対する microendoscopic discectomy (MED) の低侵襲性を証明するために術後疼痛に着目した。従来他覚的所見による検討に主観的な感覚である術後疼痛の定量化を加えて MED の手術侵襲を評価する試みを行った。対象は conventional discectomy (CD) である Love 法とした。

LDH に対して MED と CD を施行した患者を対象とし、手術時間、術中出血量、術後の炎症性サイトカイン

[interleukin-6 (IL-6), IL-8, granulocyte-colony stimulating factor (G-CSF), tumor necrosis factor alpha (TNF α)] を測定した。また術後疼痛を、visual analogue scale (VAS) と疼痛を定量化できる Pain Vision[®] PS-2100 [ニプロ (株), 大阪] を用いて測定・評価した。その結果、MED では術中出血量、血清 IL-6 値、Pain Vision[®] PS-2100 による術後疼痛評価が有意に低かった。

CD と比較して、IL-6 値、VAS による手術侵襲評価で MED の低侵襲性が示された。また、新たな指標として使用した Pain Vision[®] PS-2100 による術後疼痛の定量化でも MED の低侵襲性が示された。術後疼痛が少ないことは術後の早期回復に寄与するため、LDH に対して MED の適応があれば積極的に施行することが望まれる。

Keywords : lumbar disc herniation (LDH), operative invasiveness, microendoscopic discectomy (MED)

V. 研修医発表 (大森病院初期研修医) I

8. 妊娠後期の検査で見つかった梅毒合併妊娠の 1 例

伊藤友梨香 (大森研修医)
松尾若菜 (大森産科婦人科)

初妊婦の 28 歳女性。他院で妊婦初期検診を受けた後、妊娠中後期の定期検診を受けていなかった。東邦大学医療センター大森病院 (当院) での分娩を希望し 36 週 1 日に当院受診、外来での検査で梅毒陽性を認めた。入院後よりペニシリン G2400 万単位の 10 日間連続投与を行ったが、その後 4 週を経過せずに妊娠 40 週 2 日で自然分娩に至った。児には理学所見、検査所見共に梅毒感染を示唆する所見を認めなかった。

Keywords : syphilis in pregnancy, treponema pallidum, sexually transmitted disease (STD)

9. 不全型脊髄視神経炎に対しアルブミン製剤を用いた単純血漿交換療法を施行した 1 例

住田実穂 (大森研修医)
大橋 靖 (大森腎臓学)

41 歳女性。2011 年より不全型視神経脊髄炎に対しステロイド療法さらには二重濾過血漿交換療法、血漿吸着療法を行うも視力障害が進行するため、2014 年 4 月新鮮凍結血漿による単純血漿交換療法を計 7 回施行し、5 月には頻回の血漿交換による合併症リスクを懸念し、血清アルブミン製剤を用いた血漿交換療法に変更した。本邦では置換液を新鮮凍結血漿にすることが主であるが、今回、アルブミン製剤を用いて安全かつ効果的に血漿交換を施行した 1 例を経

験したので報告する。

臨床的課題として①本症例における単純血漿交換療法の意義、②単純血漿交換療法での抗体除去能、③新鮮凍結血漿とアルブミン製剤を置換液とした場合の利益と不利益を挙げ、特異的抗体のみならず免疫関連病因子除去を目的とした単純血漿交換とその施行回数、根拠ならびにアルブミン製剤の安全性を考察している。

Keywords : neuromyelitis optica, plasma exchange, albumin preparation

10. 劇症 I 型溶連菌感染による蜂窩織炎で急性腎不全を引き起こした 1 例

相川博音 (大森研修医)
山崎恵介 (大森腎臓学)

40 歳の既往症のない男性。2014 年 6 月某日、入院 4 日前から右足底の傷口からの膿性分泌物と疼痛を主訴に東邦大学医療センター大森病院 (当院) 来院となった。創部より A 群溶連菌を認め、蜂窩織炎の診断で、当院皮膚科に入院となった。入院第 2 病日に、血圧低下、血液凝固異常、皮膚軟部組織の壊死を認め、toxic shock like syndrome (TSL) に至り、当院救命センター転科後、抗菌薬治療と人工呼吸管理、緊急血液透析術にて救命し得た症例を経験したため報告する。

Keywords : acute kidney injury (AKI), continuous hemodiafiltration (CHDF), toxic shock like syndrome (TSL)

2 月 20 日 (金)

VI. 平成 25 年度プロジェクト研究報告 3

1. 長野県須坂市における女性高齢者の保健指導員経験と ADL の関連 : 保健指導員活動に焦点をあてて

今村晴彦, 桑原絵里加 (衛生学)

長野県の「健康長寿」は、これまでさまざまな要因が指摘されてきた。その 1 つに、地域の代表的な地区組織活動である保健指導員活動がある。そこで、長野県でもっとも古い歴史をもつ長野県須坂市の保健指導員活動の経験と、日常生活動作 (activities of daily living : ADL) の関連を検証するため、65 歳以上の高齢者を対象とした自記式質問票調査を実施した (回答者 10758 人, 回収率 77.7%)。女性 5958 人のうち、保健指導員経験者は 3310 人 (55.6%) であった。アウトカムは、①活動能力低下 (老研式活動能力指標が 10 点以下)、②基本 ADL 低下 (Katz の ADL 評価

尺度等で評価) の 2 指標を設定した。各種調整変数を調整したロジスティック回帰分析の結果、保健指導員の経験者は調査時点の ADL 低下の率が低いことが分かった。保健指導員の「経験なし」を基準とした「経験あり」のオッズ比および 95% 信頼区間は、①活動能力低下で 0.54 (0.45-0.64)、②基本 ADL 低下で 0.68 (0.54-0.86) であった。さらに、経験年が最近であるほど、また組織の役職を経験するほどその関連が強いことが示された。本研究によって、長野県の「健康長寿」の要因の一端が示されたと考えられた。

Keywords : health promotion volunteer, elderly, activities of daily living (ADL)

2. 卵の生存維持における Mcl-1 の機能解析

土屋勇一, 村井 晋 (生化学)

排卵後一定時間受精できなかった卵は、ミトコンドリア内のシトクローム c が自発的に細胞質へ漏出して、内因性アポトーシスによる細胞死を起こす。この現象は B-cell lymphoma 2 (Bcl-2) ファミリータンパク質群によって制御されていると予想されるが、その分子機構は不明である。われわれはアフリカツメガエル卵抽出液を用いた実験から、アポトーシス抑制性 Bcl-2 ファミリータンパク質の 1 つである *Xenopus myeloid cell leukemia-1* (xMcl-1) が卵の生存維持に重要な役割を果たすという結果を得た。xMcl-1 は細胞質で合成された後ミトコンドリアに移行して、プロテアソームにより構成的に分解された。卵が劣化してタンパク質合成能が低下すると、細胞質の xMcl-1 が枯渇し、Bcl-2 ファミリータンパク質群の機能的バランスを変化させてシトクローム c 漏出を開始させると推測された。この結果を踏まえて、われわれはマウス卵における Mcl-1 の機能解析を試みた。しかし ribonucleic acid (RNA) 干渉法によって Mcl-1 の mRNA を分解しても、マウス卵母細胞の成熟能や生存能に変化は見られなかったため、さらに検討を行っている。

Keywords : apoptosis, egg, Mcl-1

3. エピジェネティック因子 Eed の T 細胞分化における役割

内藤 拓 (免疫学)
小林秀行 (大森泌尿器)

T 細胞は外来の刺激に応じて多様なサブセットへと分化するが、このプロセスは転写調節による遺伝子発現プログラムの再編成を伴う。近年転写調節においてエピジェネティクスが注目を集めているが、われわれはその中で抑制的なヒストン修飾を触媒する Polycomb repressive complex 2 (PRC2) 複合体のサブユニットである Eed の T 細

胞分化における役割について解析を行っている。

Eed 欠損 CD4⁺ T 細胞を transforming growth factor- β (TGF β) 存在下で刺激したところ、野生型と比較して CD8 の顕著な発現上昇が見られた。Interferon gamma (IFN γ) の添加はこの過程を促進したことから、腸上皮間リンパ球分化経路の脱抑制である可能性が示唆された。また C*d*8 遺伝子を含む細胞傷害性 T 細胞 (cytotoxic T lymphocyte : CTL) の遺伝子発現プログラムに重要な Runx 複合体の欠損は、この過程を部分的に阻害した。さらに増殖刺激に phorbol 12-myristate 13-acetate (PMA)/Ionomycin を用いた場合、一部の細胞は CD4 発現が抑制されることにより CTL 様の表現型を示し、CTL に特徴的ないくつかの遺伝子の発現も確認された。これらの結果より、Eed は TGF β などのシグナルに応じて正常な T 細胞分化プログラムを発現するのに必要であることが明らかとなった。

Keywords : epigenetics, gene regulation, T cell

VII. 一般演題 2

4. 食道癌術後に両上肢麻痺を生じ頸椎後縦靭帯骨化症が発見された 1 例

増田香織, 大岩彩乃, 寺田享志, 落合亮一 (大森麻酔科)

頸椎後縦靭帯骨化症 (ossification of posterior longitudinal ligament : OPLL) は、肥厚した後縦靭帯により脊髄や神経根の圧迫障害を来し得る疾患である。今回われわれは食道癌術後に両上肢麻痺を生じ、OPLL による中心性頸髄損傷と診断された症例を経験したので報告する。

64 歳男性。下部食道癌に対し、硬膜外麻酔併用全身麻酔下で右開胸開腹食道亜全摘、胸骨後胃管再建、腸瘻造設、3 領域郭清が施行された。術後 1 日目に片側上肢挙上困難を認め、術中体位による一過性末梢神経障害と考えられたが、術後 2 日目に両上肢とも挙上困難となった。Magnetic resonance imaging (MRI) にて頸椎全体に OPLL と脊髄圧迫所見を認めたことより、潜在した OPLL に対し術中体位の負荷が加わり障害を来したと推測する。食道癌術後という点からもステロイドパルスによる保存的治療が選択され、現在もリハビリを継続している。本症例を通し、手術中の体位が術後神経障害のリスクとなることを再認識し、術前評価を含めより慎重な周術期管理の必要性を感じた。

Keywords : esophagectomy, spinal cord injury, patient positioning

5. 左室内血栓を伴った急性心筋梗塞の 1 例

松本新吾, 冠木敬之, 藤野紀之

山崎亜希子, 池田隆徳 (大森循環器内科)

40 代男性。突然の胸痛を主訴に来院。来院時に心電図で ST 上昇、採血では心筋逸脱酵素上昇を認めたため、急性心筋梗塞の診断で入院となった。来院時に施行された心臓超音波検査では、左室心尖部に 3×4cm 大の血栓が確認された。直ちに緊急カテーテル検査を施行したが、冠動脈に有意狭窄を認めなかった。しかし、入院後の心臓 computed tomography (CT) 検査では左冠動脈前下行枝末端に完全閉塞を認め、左室心尖部の急性心筋梗塞と診断された。入院後に血栓症をスクリーニングしたところ、頭部 magnetic resonance imaging (MRI) で複数の脳梗塞が確認されたことから、左室内血栓の剥離に伴う塞栓症が疑われ、入院 8 日目に外科的左室内血栓除去術を施行した。入院後に行った追加採血からはループスアンチコアグラント抗体が陽性であり、抗リン脂質抗体症候群の合併が確認され、急性心筋梗塞の発症や左室内血栓形成に影響を及ぼしたと考えられた。貴重な症例を体験したため、文献の考察を踏まえ報告する。

Keyword : acute myocardial infarction

6. 生物学製剤投与中に B 型肝炎が再活性化した 2 例

佐々木大樹, 高田伸夫, 岩下裕明
勝俣雅夫, 宮村美幸, 菊地秀昌
岩佐亮太, 新井典岳, 古川竜一
山田哲弘, 曾野浩治, 長村愛作
青木 博, 中村健太郎, 吉松安嗣
竹内 健, 鈴木康夫 (佐倉内科)
中島 新 (佐倉整形外科)

B 型肝炎ウイルス (hepatitis B virus : HBV) 既感染例では、免疫抑制剤や生物学的製剤投与中に再活性化し、劇症肝炎を発症する危険が指摘されている。東邦大学医療センター佐倉病院で、リウマチ例とクローン病例で治療中に再活性化を認めたが、いずれも肝炎を発症することなく経過。しかし、リウマチ例では、新規生物学的製剤を追加投与後に肝炎・肝不全を来した。肝臓学会ガイドラインで HBVDNA 陽性化後は抗ウイルス療法が必要とされているが、HBV は複雑な経過を示すため、きめ細やかな治療戦略が必要と考えられた。

VIII. 研修医発表 (大森病院初期研修医) 2

7. メトトレキサート使用後の汎血球減少を認めた1例

小林 優 (大森研修医)
河越尚幸 (総合診療内科)

関節リウマチでメトトレキサートを内服中の84歳女性。口腔粘膜障害を主訴に東邦大学医療センター大森病院に来院し、受診時汎血球減少を来していた。メトトレキサート投与3年経過していたが、内服中止し、可及的速やかな葉酸投与や血小板輸血、granulocyte-colony stimulating factor (G-CSF) 投与により症状および汎血球減少が改善した。副作用を予測する明確な因子には乏しいが、適切な対処により改善した1例を経験した。

8. 繰り返す急性腹症を契機に診断された遺伝性血管性浮腫の1例

川合玲子 (大森研修医)
前田 正 (総合診療内科)

後天性血管性浮腫 (acquired angioedema: AAE) は、補体抑制因子 C1 インヒビターの機能低下により皮膚・消化器粘膜・気道粘膜に発作性限局性浮腫を生じるまれな疾患である。急性発作時には C1 インヒビター製剤が有効製剤であるが、疾患認知度の低さから適切な治療に結びつかない場合も多い。今回われわれは、急性腹症を契機に後天性血管性浮腫と診断され、院内の治療体制構築に至った1例を経験した。

44歳女性。心窩部痛と口唇腫脹を主訴に当科を受診した。症状は無治療で軽快したが、経過と C4 低値より血管性浮腫を疑い、予防内服を開始した。退院後 C1 インヒビター活性低値、C1 インヒビター定量低値、C1q 低値より後天性血管性浮腫の診断となり、院内で C1 インヒビター製剤を常備する方針となった。急性腹症の鑑別として血管性浮腫を考える必要があると考えられた。

Keywords: acquired angioedema (AAE), acute abdomen, C1 inhibitor

9. 急性発症した若年者の急性膵炎、胃びらんを来した1例

島田脩平 (大森研修医)
菅澤康幸 (総合診療内科)

若年者で腹痛を主訴に救急外来を受診する人は、珍しくない。しかし既往歴なく、若年者で突然腹痛を来し、その所見として膵アミラーゼ上昇と内視鏡所見で胃びらんが認

められるケースは少ないと思われる。今回このような症例を経験したので、考察を加えて発表する。

17歳男性。当日まで特に症状なく経過。当日の夕食を食べ、就寝していたところ、夜半過ぎ、突然の腹痛が出現した。吐き気を伴い、心窩部痛が持続していた。自宅で経過を見ていたが、症状続行するため、翌日未明、東邦大学医療センター大森病院救急外来を受診した。原因不明の腹痛であるため入院とし、その後の検査で急性膵炎を疑う所見あり。若年者で膵炎を引き起こす起因として膵胆管合流異常症の有無などを考慮して精査を行った。

上部消化管内視鏡、腹部超音波、腹部 computed tomography (CT) を施行し、その結果急性膵炎と胃びらんを認めた。このため、絶飲食の下 meropenem 3g3, thrombomodulin, famotidine を併用投与して治療を行った。再度上部消化管内視鏡、腹部超音波、腹部 CT 施行し、所見の改善と症状の改善を確認した。

急性膵炎と胃びらんを合併した症例を経験した。今まで腹腔内疾患に関しての既往歴を認めず、発症年齢が17歳と若い点、また膵臓と胃という近接臓器で所見を認めたという点に注目し、若年者で膵炎を引き起こす起因として膵胆管合流異常症の有無などを考慮して精査を行ったが、現在まで特異な所見は得られていない。今後も症状の変化を経時的に経過観察することになっている。

Keywords: stomachache, pancreas, young

10. 骨盤内膿瘍に対して長期抗菌薬投与し膿瘍の縮小を認めた1例

川田有香 (大森研修医)
福井愁人 (感染管理部)

入院する2年前に遷延する腹痛と発熱が発症した。同症状でさまざまな医療機関に入院し精査するも原因は不明で、エンピリックな抗菌薬投与を繰り返しては退院した。最終的に入院した病院で骨盤内膿瘍を指摘された。根治には膿瘍に隣接する付属器も含めた婦人科臓器の摘出を提案されたが、妊孕性を保ちたいとのことで東邦大学医療センター大森病院を紹介受診され精査加療目的で同日入院した。臨床症状・各種検査結果を総じて、噴石陥頓により発症した虫垂炎とその穿孔による長期間の炎症波及によりできた骨盤内膿瘍と診断した。膿瘍に対し抗菌薬投与を継続して施行したところ、day 18に腹痛は消失し腹腔内膿瘍も縮小したため、day 86に退院した。退院後のフォローの腹部 computed tomography (CT) でも膿瘍は縮小傾向であり、抗菌薬は約12週間で中止した。不完全な治療で形成された膿瘍が、内服治療により改善をした1例であった。

Keywords: pelvic suppuration, antibiotics, prolonged case abdominalgia

11. 悪性リンパ腫と鑑別を要した脳膿瘍の1例

栄山雄紀 (大森研修医)

野本 淳 (大森脳神経外科)

62歳男性。鼻閉と嗅覚低下，鼻出血を認め，東邦大学医療センター大森病院耳鼻咽喉科にて下鼻甲介の生検を施行したところ，natural killer T (NK/T) cell lymphomaと診断された。その後，左上下肢不全麻痺と発熱が出現したため頭部 computed tomography (CT) を施行したところ，右被殻に低吸収域を認めた。Magnetic resonance imaging (MRI) では diffusion (weighted) image (DWI) で高信号域，gadolinium (Gd) 造影で ring enhance を認め，脳膿瘍もしくは悪性リンパ腫の中枢神経浸潤が疑われたため，脳神経外科紹介となった。抗菌薬投与でも同部位の腫瘤影に著変は見られなかったため，排膿と診断目的に navigation 下に定位的組織生検術を施行した。黄白色の排膿を認め，脳膿瘍と診断したが起炎菌は同定されなかった。波及元も不明である。抗菌薬投与を継続し，神経症状改善したため退院とした。

今回，悪性リンパ腫と鑑別を要した脳膿瘍の1例を経験

したので，各種検査での比較なども交えて報告する。

Keywords : brain abscess, malignant lymphoma, stereotactic biopsy

12. 非接触式広角眼底観察システムを用いた顕微鏡下強膜内陥術の1例

矢田圭介 (大森研修医)

出口雄三 (佐倉眼科)

従来の裂孔原性網膜剥離に対する強膜内陥没術では，顕微鏡と双眼倒像鏡を使い分けて使用する必要があった。しかし，カールツァイス社 (Jena, Germany) の Resight に代表される非接触式広角眼底観察システムの登場により双眼倒像鏡によって行われる手術工程の簡素化が可能となった。今回，裂孔原性網膜剥離に対し，Resight を用いた強膜内陥術を施行し，網膜復位を得られた症例を経験したので報告する。

Keywords : wide angle, viewing system, retinal detachment, scleral buckling